

とスコットランドの絆』(同文館出版)なる著作として発表された。それは主として日本人留学生の側からのアプローチであった。

O. チェックランド女史は夫君とともに数回来日目の経験がある。彼女は北氏の研究成果を見守りながらスコットランドの人々の日本での活躍(Part 1)、日本人のスコットランドでの学習・研究(Part 2)、そしてスコットランドがその後の日本の工業化に及ぼした影響(Part 3)について関心を示し、主としてスコットランド側から見た考察を深めた。その成果が3部からなるこの著作である。その間に来日し調査を兼ねて数多くの日本人研究者と対話を重ねた。その熱意と努力に敬意を表したい。

2. O. チェックランド女史は1860年代の日英の外交関係から説き起こし、その過程で問題になった灯台建設や鉄道の創設に始まる一連の技術移転の過程を詳述している。19世紀後半の世界的規模での交通・通信体系と金本位制の成立に主導的役割を果たしたイギリスは、その一環としての東アジアの日本の重要性に注目していた。それは単に貿易上の直接的な利害関係の域を超えて、世界的な交通・通信体系の整備を優先的に考慮しての技術移転にならざるを得ない必然性をもっていた。しかも機械諸設備の輸出や技師の派遣に留まらず、高度の技術教育機関の創設のために若くて優秀な技術者を日本人の教育に当たらせるという広い視野をもっていたのである。

さらにこのような日本の工業化の初期的段階に留まらず、三菱汽船会社では船長など高級船員に多数のイギリス人が雇用されたことや、イギリス造船業と三菱長崎造船所との緊密な技術的関連性、日本海軍の新鋭艦艇を建造したこと、あるいは日本製鋼所の創設など、日本の海運・造船・製鋼部門を中心に日本の工業化に果たしたスコットランドの影響力は、その後も長く保持されていたとの指摘がなされている。興味深い資料やエピソードを交えた叙述は説得力に富んでいる。

その間に活躍した外交官、海運会社、貿易商社、銀行、技術コンサルタント等の複雑なネットワークに分析を加え、技術移転の過程をトータルシステムとして論じようとする姿勢を窺い知ることができる。技術移転を生産の場における技術の習得や技術教育機関における教育制度の整備・定着の過程に注目し、比較的限られた範囲のなかで技術移転が論ぜられることが多いなかで、注目すべき研究視点といえよう。

O. チェックランド

『イギリスの明治日本との遭遇 1868-1912』

Olive Checkland, *Britain's Encounter with Meiji Japan, 1868-1912*, The Macmillan Press, 1989, xxi+357 pp.

1. この著作はグラスゴー大学名誉研究員であるO. チェックランド女史のスコットランドと明治日本の交流についての研究である。明治期のイギリスからの技術移転が主要なテーマであるが、こうした成果を生み出すに至った背景にはスコットランド経済史の研究者である創価大学教授北政巳氏とO. チェックランド女史の研究交流があった。この著作自体が日英の研究交流の賜である。

北氏はかつてO. チェックランド女史の夫君であるグラスゴー大学のS. G. チェックランド教授(故人)のもとに留学し親しく夫妻の薫陶を受けた。地域史としてのスコットランドの研究に幅広い関心を示すうちに、チェックランド夫妻の示唆でグラスゴー大学と関連の深い明治初期の工部大学校(東大工学部の前身)の創設、特に主導的役割を果たしたH. ダイアーについての研究を始めた。調査を進めるうちに日英の幅広い技術交流の歴史が明らかになり、その成果は1984年『国際日本を拓いた人々—日本

3. 一方、これに対して著者は岩倉使節団の外交的役割をまず強調し、日本側の積極的な姿勢も同時に評価している。日本側のレスポンスについて、いわゆる上からの近代化と下からの近代化の両側面があるとの認識を踏まえながら議論を展開している。岩倉使節団に見られるような明治政府の先導的な役割と同時に、それに対応して日本の若い知識層がためらうことなく科学技術の分野にも積極的に参入していったことを、日本人留学生の動向を通じて検証しようとしている。

ことに H. ダイアーと同窓の関係にあった山尾庸三(長州藩留学生・工部卿)、グラスゴー大学でケルヴィン卿(W. トムソン)に学んだ志田林三郎(1879年・工部大学校電信科卒)や田中館愛橘(1882年・東京大学理学部物理学科卒)などについての調査を披瀝している。その間にスコットランド人のエトスと日本人の意識に共鳴するものがあるとの主張が随所ににじみ出ているのを窺い知ることができる。

しかしそれは単に日英の知的交流の域に留まらず、イギリスが世界の交通・通信体系を維持するために必要な学術的な国際協力体制の確保という意味もっていたのである。志田の存在は万国電信条約に加盟した日本の技術水準を保証するものであり、また田中館はグリニッジ標準時の制定(子午線条約)、国際メートル条約への加盟、度量衡法の制定、国際的地磁気観測事業への参加などと多面的な活躍によって、世界的な交通・通信体系を軸として形成された国際社会を科学技術の側面から支える重要な存在であった。

こうした科学技術の成果が条約改正を成功に導く有力な基盤を形成していたことに注目する必要がある。それはまた同時に日英同盟の締結に際しても誘導路としての役割を果たすものであった。このように技術移転の過程は外交・政治・経済などとの緊密にして複雑な背景をもって展開されたのである。

また 19 世紀後半は万国博覧会の時代であった。ロンドンをはじめ各地で開催された万国博覧会は、日英の交流の幅広い展開を示す機会になった。そのほか工部大学校の教師として来日していた建築家 J. コンドルが日本の洋式建築に及ぼした影響、あるいはジャポニズムの風潮など、日英の技術移転には興味つきない話題が多い。

4. 1870 年代の交通・通信体系の整備によってユーラシア大陸の東の端の島国日本と西の端のブリテン島が定期便と即時的通信によって結ばれ、そこに

展開された技術移転の実態を明らかにしようとした意図は、この時期が技術移転論における技術の地域的拡散に画期的な作用を及ぼすものであっただけに、重要な示唆を与えるものとして大いに注目される。

スコットランドと日本の関係は交通・通信体系に関連する分野が一連のシステムとして、技術教育をも含めて導入されるという必然性をもっていたことは先に述べた。このように個々の技術としてはなく一連の技術が体系化されたものとして一挙に導入されたのであるが、技術をシステムとして認識し、それを受容しようとした日本側の対応は何故可能だったのであろうか。それは 19 世紀の世界的な技術的条件とともに、日本の江戸時代の社会構造や組織に対する認識等の内発的な要因について、従来の見解と異なる視角からの深い考察が必要であろう。本書の著者はその点にまでは及んでいない。技術システムに理解を示し、それを受容し、さらに日本的に変容しようとした過程を解明することは、日本の研究者に与えられた今後の研究課題と言えよう。

それはまた同時に、交通・通信体系が製造業の技術移転に及ぼした役割に注目することであり、このことは日本の工業化のいまひとつの重要な側面でもある。輸出産業を中心に在来産業を近代化し再編成するのに交通・通信体系の果たした役割は大きい。さらに紡績、製糖、製紙等の軽工業部門の技術移転で主導的役割を果たしたイングランドとの対比においてスコットランドを論ずることは興味深い課題であろう。

工業化のテンポの早い日本では、やがて 20 世紀に移る頃にはドイツやアメリカなどからの技術導入が増大するようになる。技術における国際的主導力が激しく変化するなかで、スコットランドはどのような歴史的な使命をもっていたのであろうか。それは国際的な主導力の推移に左右されるという側面があると同時に、また日本の対応の仕方にも大きく影響されるものであったはずである。これも今後に残された研究課題であろう。

最後になったが巻末に付せられた日本の用語の解説、日本人の略歴、日本の学会や定期刊行物の一覧、ケンブリッジの日本協会における研究発表一覧(1888~1892)、詳細な参考文献、著者別の文献一覧、索引等に約 130 ページを費やし読者の便宜に供している。今後の研究に寄与するところ大で、その労苦に敬意を表するものである。

[今津健治]